



陽気な連中

1958. 7

上映映画解説

Nc. 53

陽気な連中

モスクワ・キノコムビナート映画1934年作品

脚色・監督 ゲ・アレクサンドロフ
作曲 イ・ドゥナエフスキ
撮影 ヴェ・ニリセン
美術 ア・ウートキン

—— キャスト ——

牧童、後に音楽家コースチャ
……………レオニード・ウチョーソフ
女中さんアンニェータ……………エル・ペ・オルロワ
お嬢さんエリョーナ……………エム・スソレルコワ
お母さん……………イ・エ・チャーブキナ
馭者……………エフ・クリヒン

〔解説〕

この映画は「第一回ソヴェート・ジャズ・コメディ」として作られ、それまでイデオロギーを強く押し出していたソ連映画の「転換」としてかなり問題になった作品である。わが国では1935年（昭和10）7月11日、日比谷映画劇場で封切られた。（三映社輸入）

当時の反響の一例として、飯田心美氏は『これはソヴェートに於て作られた最初の音楽映画であるが、この一篇の中には、いろいろな問題が含まれてゐる。その沢山の考へるべきものを持ってゐるといふ点で一見の価値ある映画である。（中略）ストーリーは至極他愛ないもの、カフカズの牧童コースチャが生来音楽好きなどころから独乙の老人カールにヴァイオリンを教はり、黒海の避暑地に於て名指揮者と間違へられるといふ話で格別これまでのソヴェート映画のやうに建設的な意志もなく、宣伝的な意味もない。実に天真爛漫として無邪気きわまる人物の行動に終始したものである。全体の形式は「ジャズ・コメディ」と銘うたれてゐるだけあって、徹頭徹尾、音楽を駆使して筋がはこばれてゐる。此の映画をみてゐるとき、なにかいちばん興味をひくかと言へば全篇に横溢したロシア人特有の狂喜乱舞ぶりと底知れない馬鹿々々しさである。こ

れは一面、シツコイといへばシツコイし、油ぎってゐると言へば、そう言へなくもないが、然しその馬鹿騒ぎ破目外れの徹底した境地は恐らく我邦のやうなコセコのセした島国根性の人種には味到し切れぬ味がある。ミュージック・ホールの舞台上にヒョッコリ姿を現した主人公が指揮者になりますし、聴衆およびオーケストラを前にして「ハンガリアン・ラブソディー」に合せて変妙な身振りをする。炬火の光に揺られながら静かにすゝむ葬式の楽士たちが突如として愉快なダンス曲をやり出す。ジャズ・オーケストラの一团が演奏中に内輪もめを起し喧騒の中から変ったジャズを聞かせる。最後の場面では楽器を破壊した結果として声でもってジャズを唄ふ。その他、牛、驢馬、羊、山羊などの狂宴もあり、ヤンキーも此を見たら啞然となるのであろうと思はれる場面が充満してゐる。（中略）形式から言つて未完成で雑然としたものであるが神経を太くしてみてゐれば仲々に得るところある特殊映画。最初の移動シーンだけ見てゐても野放図な愉快さは直ちに感じられる。〔キネマ旬報第544号（1935年6月21日号）「各社試写室より」〕と述べている。（引用文の片名使いは原文のまま）

「陽気な連中」とソ連映画

袋 一 平

『陽気な連中』は1934年の作品である。それはソ連映画が活動の最盛期にのぼりつめた時期で、この一年だけでも、長く話題に残るような作品をかなりたくさん出している。

有名な『チャパーエフ』がある。日本にはプロコフィエフの音楽だけが伝えられた『キージェ中尉』がある。今日第一流の作者といわれるロムはモーパッサンの映画化『脂肪の塊』ではじめてその鬼才をあらわした。曲りなりにも日本で公開された『白夜』や『雷雨』、監督ドンスコイの名をあげた『幸運の天才』もこ

の年の作品である。さらにソ映画史上、音楽喜劇というものがはじめて登場している。一本はサフチェンコ監督の『アコーシオン』で、もう一本がこの『陽気な連中』である。

『陽気な連中』はいろいろな点で人をおどろかせた。ソ連の人ばかりではない。私たち日本のお客もびっくりした。思いきってばかばかしいジャズさわぎが展開する。動物どもまで一役演ずる徹底したアトラクションは、いまのロカビリーどころの話ではない。これが『アトラクションのモンタージュ』というのか——と本気で首をひねった人たちもあった。『アトラクションのモンタージュ』というのは、エイゼンシュテインがとなえて、世界映画界に衝動をまきおこした、ユニークなそして難解な理論であった。『連中』の作者アレクサンドロフは『同盟罷工』『戦艦ポチョムキン』以来のエイゼンシュテインの共同監督である。彼が、F氏から離れての、独立第一回作品がこの『連中』なのだから、人々がアッと言ったのもむりはない。

ところで結論だけを言ってみれば、これは問題の『アトラクションのモンタージュ』の理論で構成された映画ではないが、その影響を受けた映画である、とはいえるようだ。もともとエイゼンシュテイン自身、その理論を完成することはできなかったし、したがってその理論にもとづく作品を成功的に創作するまでにはいたらなかった。『十月』がそうだし、日本で公開された『古きものと新しきもの』も、いわば実験の域を出ないものであった。

それにしても『ポチョムキン』から超ロカビリーへの飛躍は、監督アレクサンドロフの空想力の豊かさに人の度胆をぬいた。映画自体が顔負けした。『連中』は新しい純真な世界と、古い偽善的な世界との対置の上に構成された、一種の風刺喜劇となるはずのものであった。陽気な牧童で、後にジャズの指揮者になるコスタチャと、しがない女中で、後に歌手となるアナユータが、前者を代表するものとすれば、別荘のせいたくな母娘は後者を代表するものである。

ところが、映画の発端で提示されたこの対置は、いっこうに進展しない。途中で筋が切れて、たがいに連絡のない場面がせり出してくる。ときにはエクセントリックなドタバタに落ちる。いつの間にか主人公の形象には、社会的な、また心理的な内容が、消え失せている。ちょうどこれと反比例して、監督の音楽的天分がいよいよ冴えてくる。奇妙といえ、いかにも奇妙な映画になった。

いまもそうだが、そのころでも、ソ連映画界には『思想的におもしろくない』作品は、どんなに時間と金を食ったものでも、お蔵にする習慣があった。私たちに知られている人について言えば、『トルクシブ』のトゥリンは『バクウの人々』で、『人生案内』のエックは『青い鳥』で失脚した。エイゼンシュテインだって『ベージン草原』を蹴られている。そういうしかつめらしい空気の中で、この『ジャズ・コメディ』は、堂々として凱旋行進をしていったのである。

その秘密はおそらく、開巻第一ページからはじまる快適な音楽のリズム、意表を衝いた新奇さ、あかるい陽気な人生観にあったのではないか。これが思想性と同じ程度にやかましい『芸術性』の欠陥や、筋のでたらめをカバーした。なによりも、観客大衆が大喜びでとびついたのである、もうけんかにはならなかった。

歌を歌えば心が晴れる
歌ってくらせば退屈知らぬ
田舎も村も歌が好き
大きな都市も歌が好き……

当代一流の詩人レベデフクマツチの歌詞はドゥナエフスキーの作曲に乗って、その文句のとおり、ソ連全土を風靡した。メーデーやスポーツ祭には、もうなくてはならない歌曲になった。つまり一種の国民歌みたいにさえた。

これは単なる偶然とはいえない。この歌ばかりでなく、映画全体にわたって、映画の製作以前に作曲が完成していた。監督はそのメロディに合わせて、撮影を進めた。だから正確な視聴覚のリズムをつくりあげ、

音楽や諸音と人物の動きとを、うまく一致させることに成功したのである。

ドゥナエフスキーの音楽は非常におぼえやすい。叙情味が濃い。ダンスにも行進にも向く。彼はベストセラー級の作曲家として長く大衆に愛されてきたが、1955年7月に他界した。映画だけでも二十数本に作曲している。

この映画はまた舞台出身ではない歌うスターを生んだ。リュボーフィ・オルロワである。彼女は『白夜』の田舎女傭の役でデビューし、その後すぐ『陽気な連中』のヒロインにばってきされて成功した。監督アレクサンドロフの一連の音楽喜劇——『サーカス』『ヴォルガ・ヴォルガ』『あかるい道』などにすべて主演している。

見方によれば、この映画はコスチャに扮したチャーソフのジャズ・オーケストラの遠足の展示会のようにもうけ取られる。彼はいまでもソ連音楽界の大御所である。さすがに頭はもうまっ白になった、そのときから4世紀が過ぎている。ソヴェト映画に当時の若々しい生命力は昔語りとなったのだろうか。

(7月19日から31日まで、月曜日を除く毎日
2時から上映)

国立近代美術館フィルム・ライブラリー